

ハナモモ定植時の活性炭・川砂混和による収量への影響			
[要約] ハナモモ定植時に1株あたり活性炭19L及び川砂180Lを混和することで、無処理区と比べて収量が増加する。			
茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所	令和7年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

本県のハナモモ栽培は、高齢者でも労力負担が少なく、中山間地域における耕作放棄地の再生品目として栽培を順調に増やしてきたが、1年枝切り出荷を主体とする産地において樹が突然枯死する「株枯れ」の発生が問題となっており、対策技術の開発が求められている。ハナモモにおける株枯れの発生は、食用モモに共通する凍害やアレロパシー物質による連作障害等、複数の要因が重なって引き起こされると考えられる。ここでは、アレロパシー物質を吸着する活性炭、排水性を改善する川砂を定植時に土壤に混和し、当処理が株枯れ発生及び収量に与える影響について明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 令和6年5月に発生した各試験区の株枯れ数について、「川砂単用区」では2株（完全枯死1株、一部枯れ1株）、「活性炭12L+川砂区」では2株（一部枯れ2株）、「無処理区」では1株（一部枯れ）である。一方、「活性炭19L+川砂区」及び「活性炭38L+川砂区」では株枯れ発生はなく、その後も令和8年1月時点で株枯れは発生していない（表1、図1）。
- 2) 1株あたりの収量（令和5～8年平均値）について、「無処理区」が131本/株であるのに対し、「活性炭19L+川砂区」は172本/株、「活性炭38L+川砂区」は164本/株と、「無処理区」より多い（図2）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、久慈郡大子町の山間地帯特産指導所圃場において実施した結果である。
- 2) 活性炭として、再生炭及び粉炭を2：8の割合で混合したものを使用した。
- 3) 川砂は、細目（2.5mm）のものを使用した。
- 4) 株枯れの発生には、アレロパシー物質、排水性、凍害等の複数の要因が関与していると考えられており、川砂・活性炭の混和では完全に対策できない場合がある。

4. 具体的データ

表1 各試験区の活性炭・川砂の混和量及び令和6年に発生した株枯れ数

試験区	植穴への混和量(L/株)			3株中の 株枯れ数(株) ²⁾
	土壌 ¹⁾	活性炭	川砂	
川砂単用	280	-	180	2 (完全枯死、一部枯れ)
活性炭12L+川砂	280	12	180	2 (一部枯れ)
活性炭19L+川砂	280	19	180	0
活性炭38L+川砂	280	38	180	0
無処理	460	-	-	1 (一部枯れ)

※定植時期：令和3年3月 供試品種：新矢口（台木：不明） 供試株数：各区3株

※全区牛糞堆肥40L・ようりん2kg混和、盛り土栽培

1) 植穴を掘り上げた土に、ハナモモのポット栽培に使用した連作土壌100Lを混和し、土壌体積とした

2) 令和6年5月に発生した株枯れ数



図1 生育良好な株（左）と完全枯死株（中）と一部枯れ株（右）（令和6年5月）

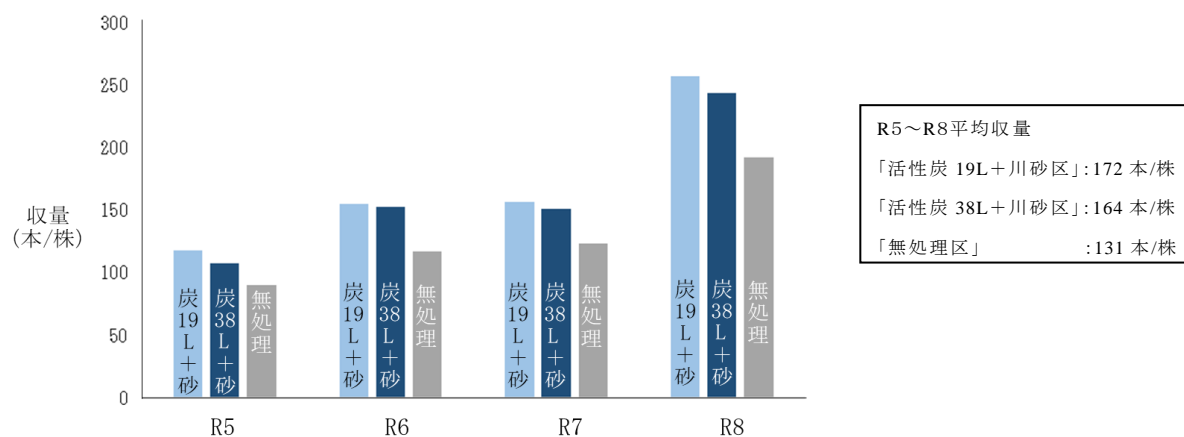


図2 「活性炭 19L+川砂区」「活性炭 38L+川砂区」「無処理区」の1株あたり収量（R5～R8）

※出荷規格に沿って60～80cmに調整した枝数について、3株平均（本/株）を算出し収量とした（無処理区のみ株枯れした1株を除いた2株平均）。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

ハナモモの株枯れ対策技術の開発とドウダンツツジの苗増殖・育苗技術の確立・令和3年度～令和7年度・山間地帯特産指導所